

その三年後に早くも日本にゐて知つてゐた林子平は、まことにあどろくべき日本人といはなければならぬ。

ついでにモントゴルフエア兄弟のことを諸君は覚えておくがよい。モントゴルフエア兄弟は輕氣球のほか、落下傘をも發明した科學者である。

二十三、千古の獨見

さて、「海國兵談」卷の三以下は全部陸軍のことを述べてゐる。

卷の三は「陸戰」、卷の四は「選士、並に一騎前」、卷の五は「押前、陣取、備立並に宿陣、野陣」、卷の六は「地形並に城制」、卷の七は「籠城並寫具」、卷の八は「武士本體、知行割方、人數之積、制度法令」、卷の九は「馬飼立込様並騎射」、卷の十は「略

書(總論のこと)」等に分けられてゐる。

これらの項目はすべて陸軍戰術に關する子平の意見をくはしく述べたものである。

子平のかうした軍事科學についての意見は、日本や支那の古い戰術の本からも學んだり、和蘭人へイトからさき、また和蘭語の本などから研究したりしたものであるが、その上に子平自身が發明したものが多いのである。

軍用機械をつくるのは、すべてすでにできてゐるものを真似るのでは役に立たないのである。必ず外國にまけない独自の工夫や發明をしなければならぬ。

大東亞戰爭で、日本の空軍がまたしく間に、英米蘭聯合國のたくさんな飛行機をたゞさちとして一舉に制空權を握つたのはいふまでもなく、天皇陛下の御稜威にこたへ奉るわが軍人の忠勇武烈の結果であるが、同時に平生の日に於いてひそかに敵

の飛行機よりもはるかに優秀な飛行機、たとへば隼號を發明工夫したわが軍事科學責任者の手柄といはなければならぬ。

子平の陸海軍各方面に對する防禦と攻撃の工夫は、子平自身が「千古の獨見」と自慢してゐるやうに、やはりその時代にあつてはだれも氣のつかない立派な發明が多いのである。

子平は自分の「千古の獨見」を仙臺の鹽釜神社の神の靈感によつて得たと書いてゐる。

それは、鹽釜神社の神主である藤塚式部が子平の「海國兵談」の出版を一所懸命に助けたことを意味するが、同時に神の國であるわが日本國を、さらに榮えさせるために一生を捧げて「海國兵談」を著した子平の心は、鹽釜の神にも通ずるであらうといふ意味にちがひない。その證據に「海國兵談」ができた時、子平は鹽釜神

社の神前に一部を供へ、「報賽のこころを」と題して、

大神の恵み普あまねきかしこくもやす國書ふみとあふぐこの書ふみ

と、歌つてゐる。

報賽のこころは 友直

大神のあまみ普あまねき

かこころもやす國書ふみ

あふぐこの書ふみ

右神みぎのかみ奏まはつて予人よじん珍めづ本ほんとあふぐ

こゝでは卷の三から卷の

十までの間にのつてゐる子

平の「千古の獨見」といはれ

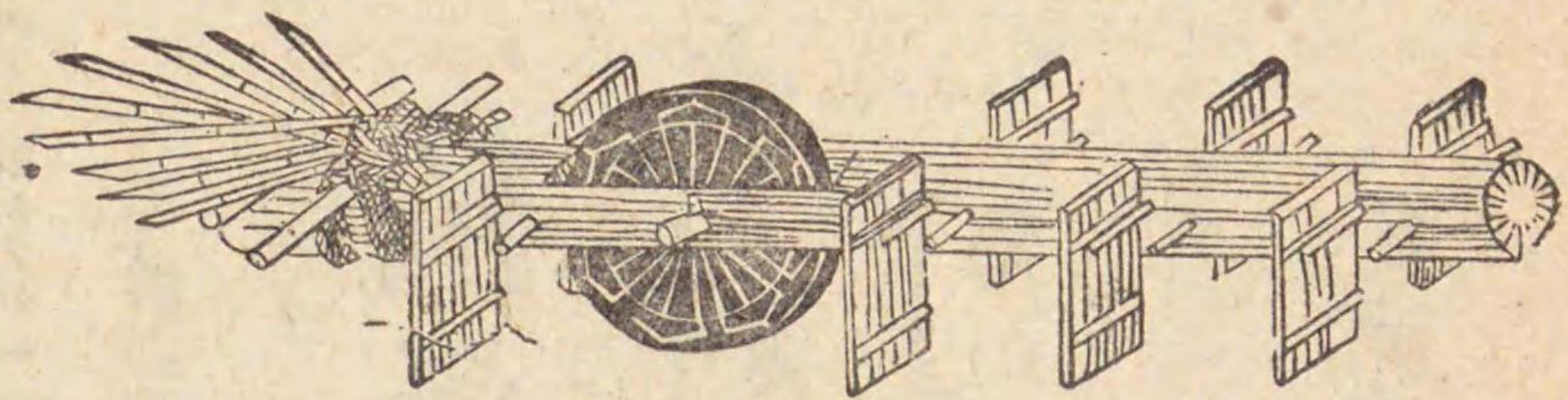
る發明を諸君に話さう。

その第一がつぎの圖にあ

る懸かきりぐるま車である。これは現

在の戦車のはじまりといつ

てよからう。



懸車

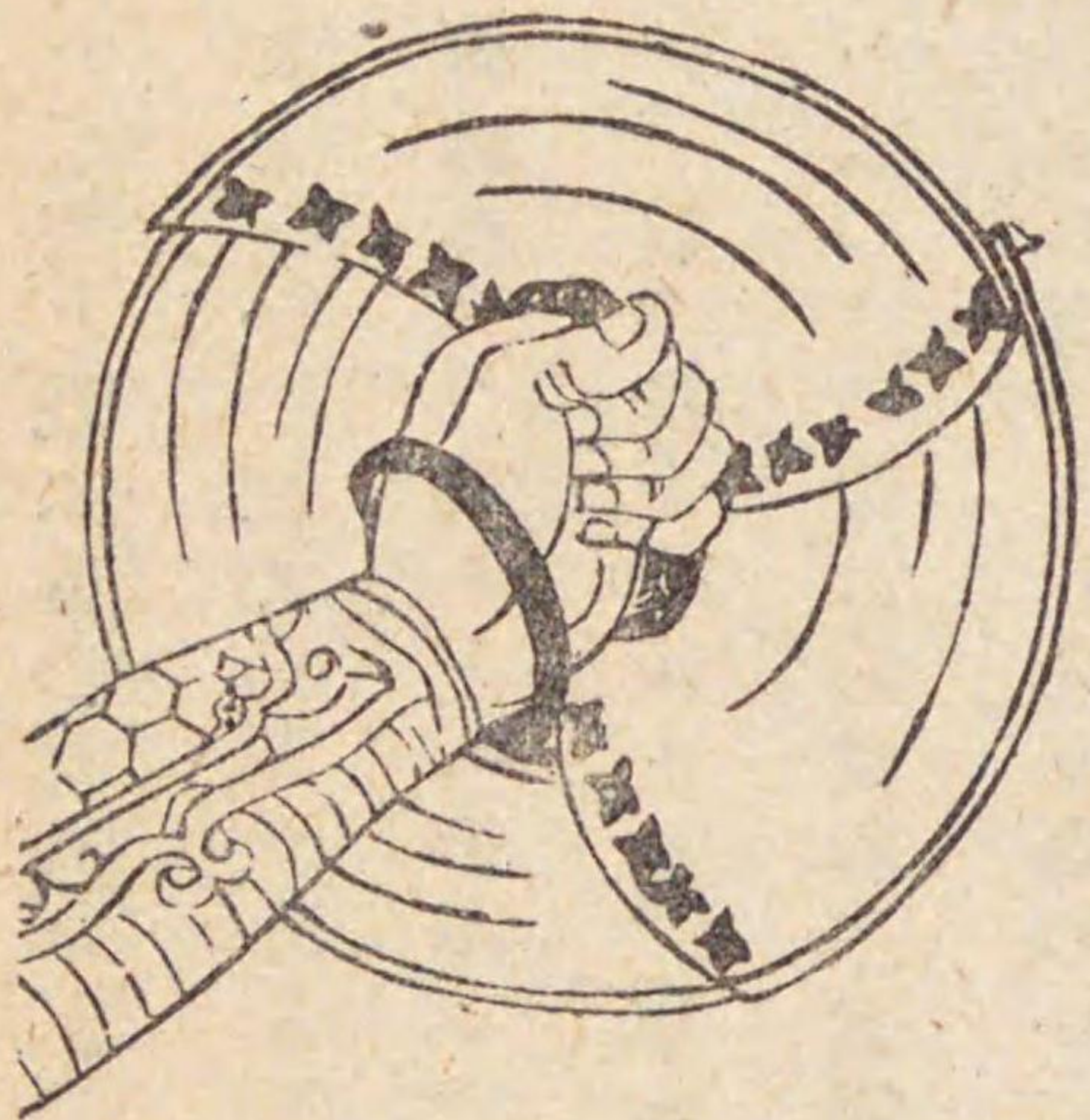
鐵も火藥もあまりなくガソリンや重油をまだ全く知らない時代に、今のやうな機械化された戦車が發明されるわけはない。軍事科學の發明は、すでにその時代に實現されてゐる科學の基本的な發明を利用して考案されるものであつて、戦車も火焰發射器も、魚雷も潜水艦も飛行機も、すべてさうである。

だから今から百數十年前の日本では、子平の發明したこの懸車を今の戦車と同じぐらゐるの有力な發明といつて差支へなからう。

圖のやうに長さ三間ばかりの太い材木に車をとつけ、そのさきにくさくさんな竹槍を結びつけたものである。ところづくについてゐる八枚の小楯のかげに人がはいつて、車をおしながら

一時に敵軍の中に突入するのである。

「敵の先頭部隊を忽ち潰亂に陥れるためには、この懸車を十車、あるひは二、三十もこしらへて、一車を八人でおしながら敵陣十間くらゐまではしづかに進んで行き、太鼓の合圖であとはめちやめちやに敵の隊中に突入すると、人も馬もすべて突き倒されてしまふ。」



牛皮でつくつた楯

と、いふことを子平は述べてゐる。その効用は今の戦車と少しもかほりがない。上の圖は牛皮でつくつた楯である。

これは圖のやうに左手で持

つて、右手に刀を抜いて敵と戦ふものであるが、今の鐵兜によく似てゐる。それから子平は、かういふことをいつてゐる。

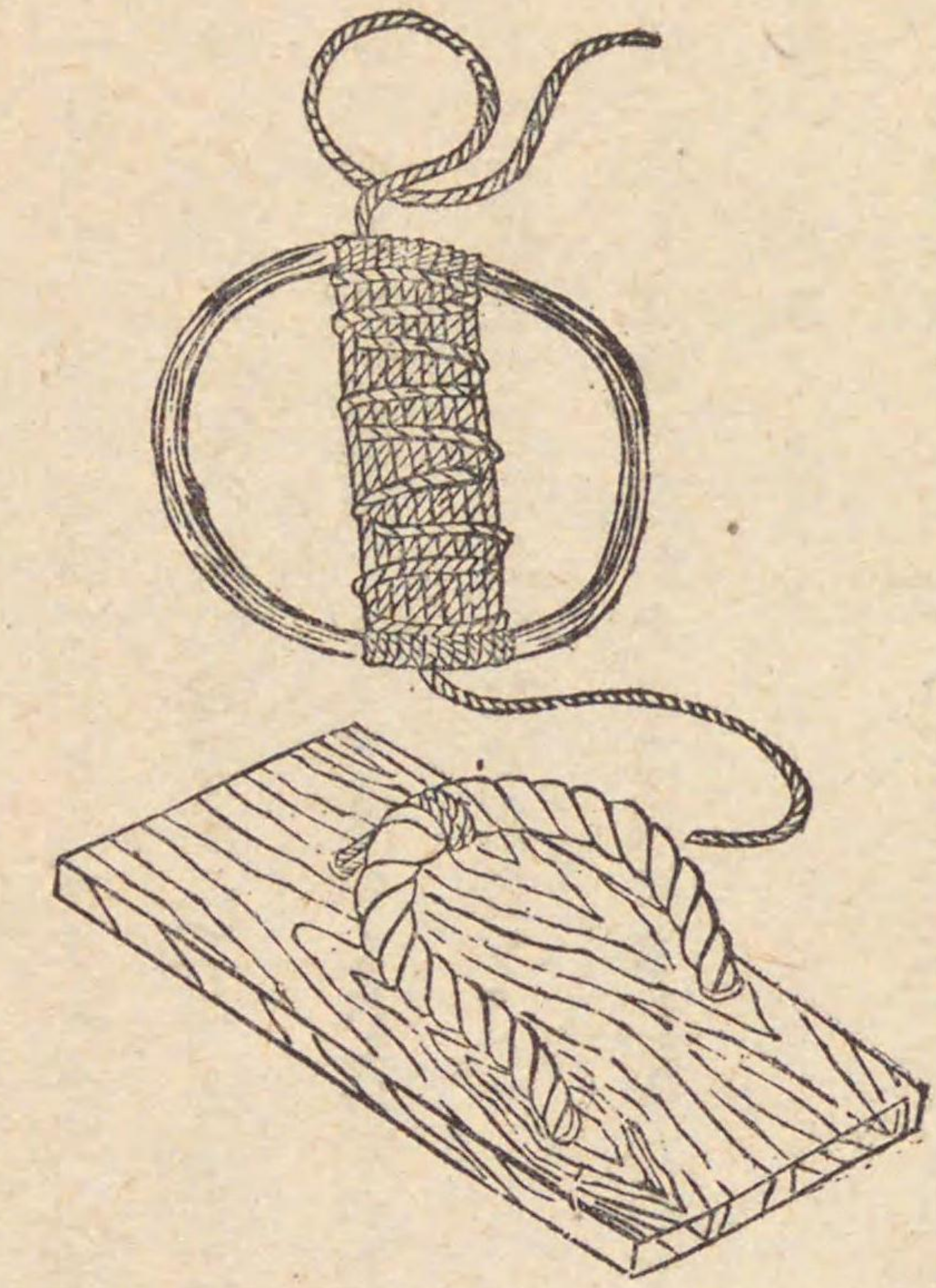
「時宜ニ因ツテ、小荷駄車ヲ、眞先キニ押出シ、車ノ陰ヨリ、弓鐵砲ニテ、打チスクムルコトモ有ルベシ。敵、押シ來ルトモ、車ニヘダテラレテ、進ミ得ザルナリ。」
こゝで小荷駄車といふのは、味方の武器や食糧を積んだ車のことであるが、平生の戦争の場合は、これは軍隊のうしろからついて行く。それをまつさきにおし出して、その車のかげに弓や鐵砲を持った歩兵がついて走りながら敵を攻撃するのである。

支那事變でもまたヨーロッパの今度の戦争でも、日本軍や、ドイツ軍の戦さの仕方は、戦車のうしろから銃劍を下げた歩兵がついて走りながら敵を攻撃するのを諸君は知つてゐるであらう。

子平は早くもその戦術をこゝに書いてゐるのだ。

また諸君はイタリアの軍隊や、フィンランドの軍隊が、雪の中の戦争によくスキ

ーを利用するのを知つてゐるであらう。



輪ぞりと板ぞり

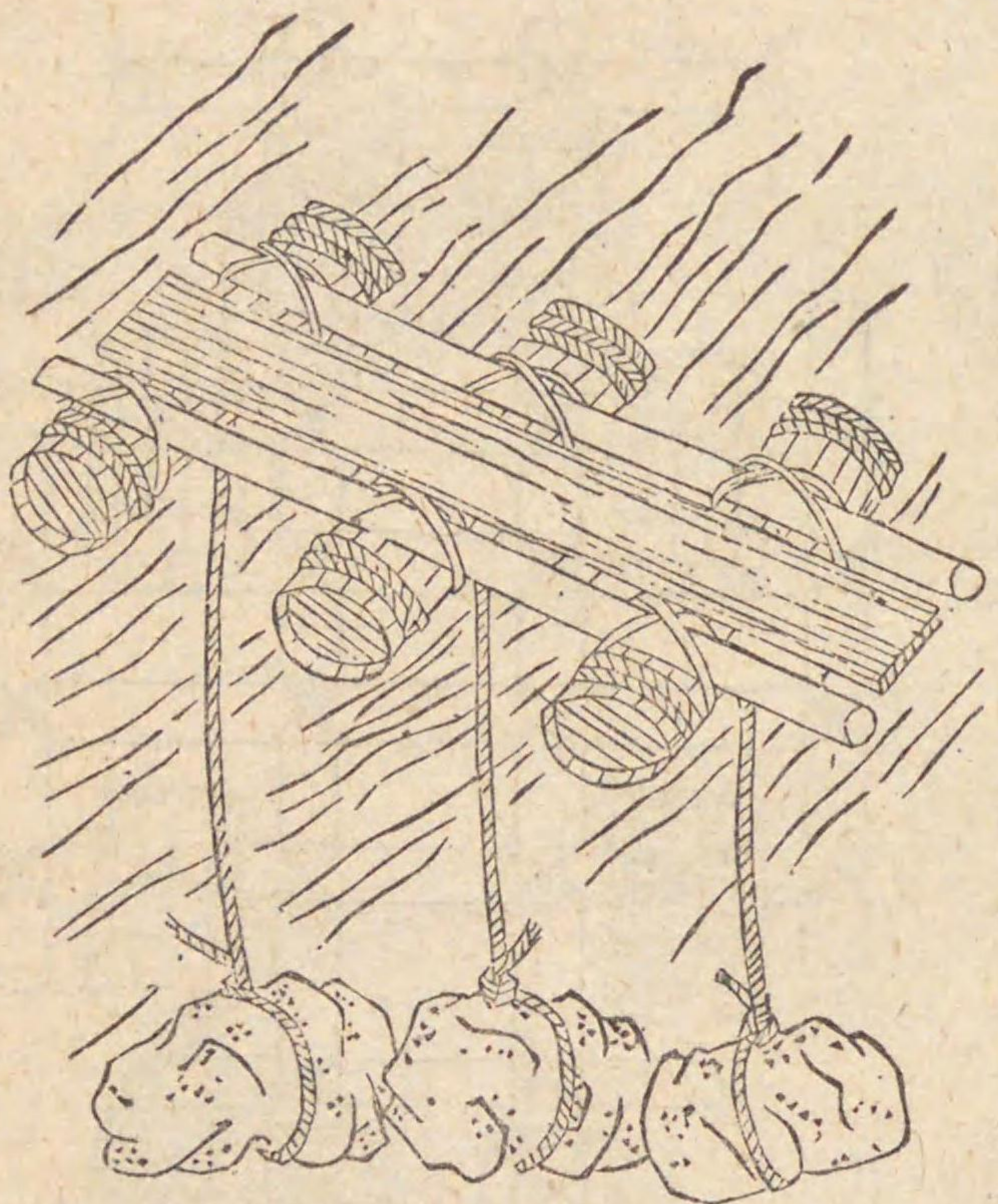
スキー部隊はわが陸軍でもすでに設けられてゐる。しかしこの發明でも子平の方が早い。子平は上圖のやうなスキーにひししい板ぞりと輪ぞりを發明して、雪の中の戦争の時に使ふことをしへてゐるのである。上が輪ぞりで下が板ぞりである。雪の中や、泥沼の中を進軍する時これを足につけるのである。

次に諸君は大東亞戦争のマレイ進撃中、敵が橋を破壊して逃げ去つた川を日本の工兵隊がとても迅速に架橋して味方を渡し、わが歩兵部隊が世界の戦史に例のない一日四十キロの速さでシンガポールへあし寄せたことを知つてゐるであらう。この時、もし工兵隊の決死的な、そして、敏速な架橋工事が少しでもあくれたならば、一日四十キロの進撃レコードはつくれなかつたであらうし、あんなにはやくシンガポール攻略はできなかつたであらう。

林子平も進撃部隊が大きな川にさしかかつて橋がない時、どうするかといふことを書いてある。

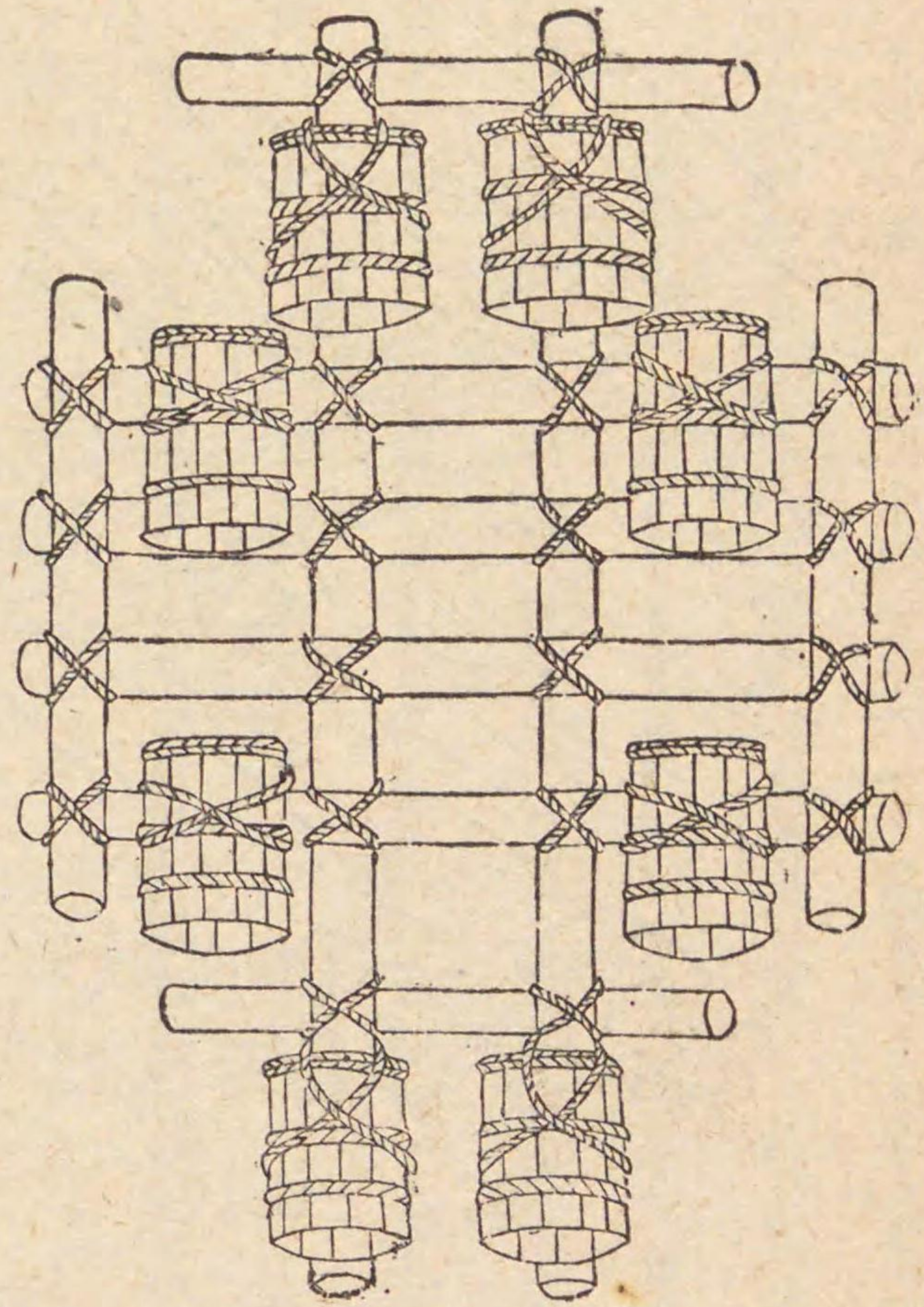
「その邊の家をこはして、その材木で筏を組んだり、附近の立木や竹などを切り取つて、筏を組んで河を渡るのである。」と、いふ風に筏を組んで川の向ふ岸にまで、とどかせて橋とするやり方を林子平はくはしく述べた上、重い馬や、車が橋の上を渡

つても橋が水の中に沈まないやうにするためには、浮力を増すために蓋をしめた空つぼの桶をたくさんとりつけた桶船と桶橋の工夫をした。それは圖の通りである。



桶 橋

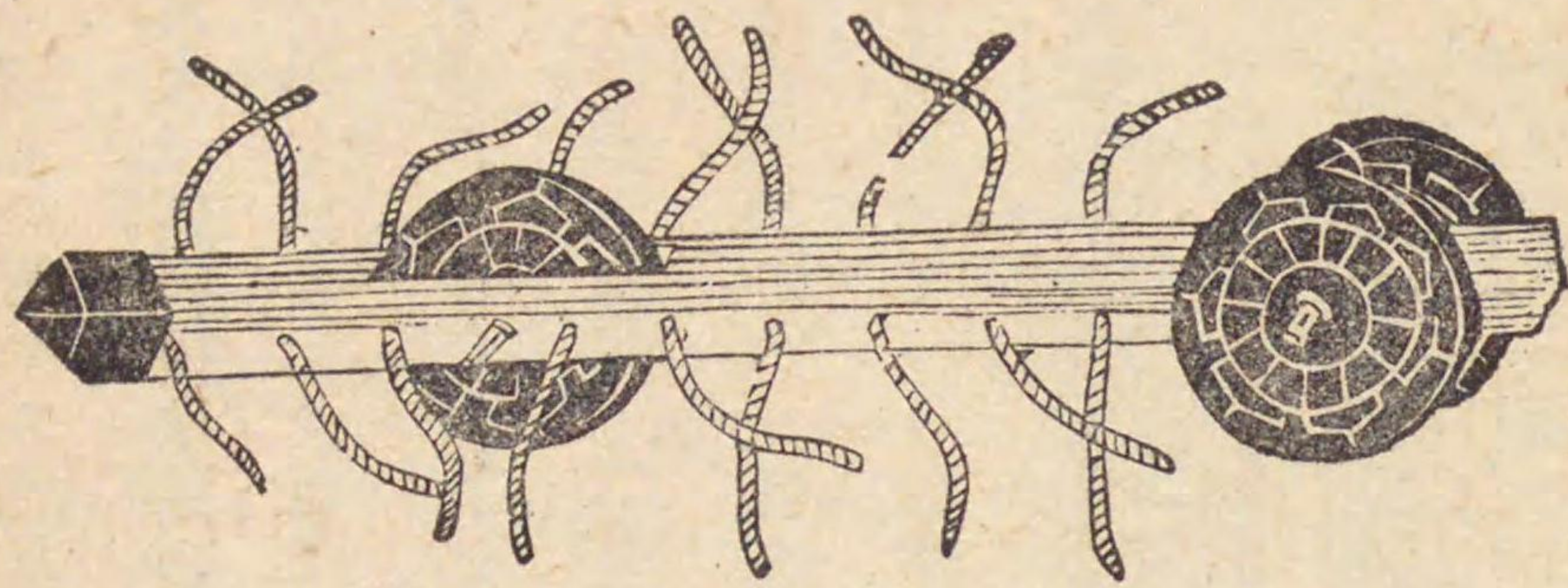
桶船の方はこれに人や馬や、荷物をのせて、櫓や櫂でこいで敵前上陸をしたり、川の強行渡河するのに使ふのであるが、桶橋は圖のやうに、河の底に石をたらしめて橋を固定させ、橋に十分浮力をつけて、重いものが上をとほれるやうにするのである。



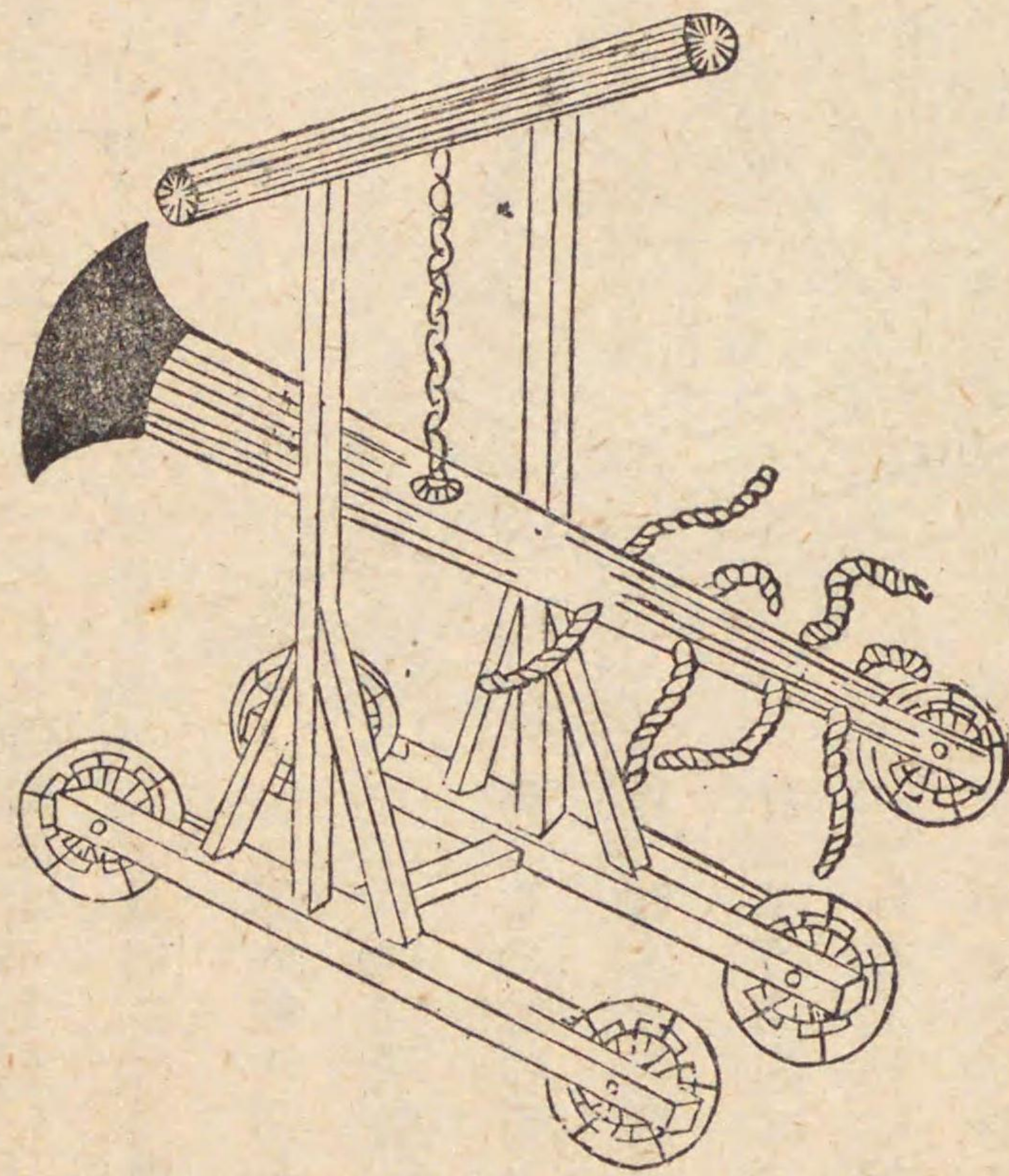
船桶

それから次頁の圖は敵の城門を破るのに使ふ破門材といふものである。これも子平が考へ出したもので、懸車に似てゐるが、長さ三十尺の大材木の先端に先きを鋭くした鐵の頭

をとりつけ、車を前後二箇所三つつけ、五十人の兵士が左右の綱を引いて城門に突貫して行つて打ちあて、またひきさがつては打ちあてて、城門や城壁をこはすのである。

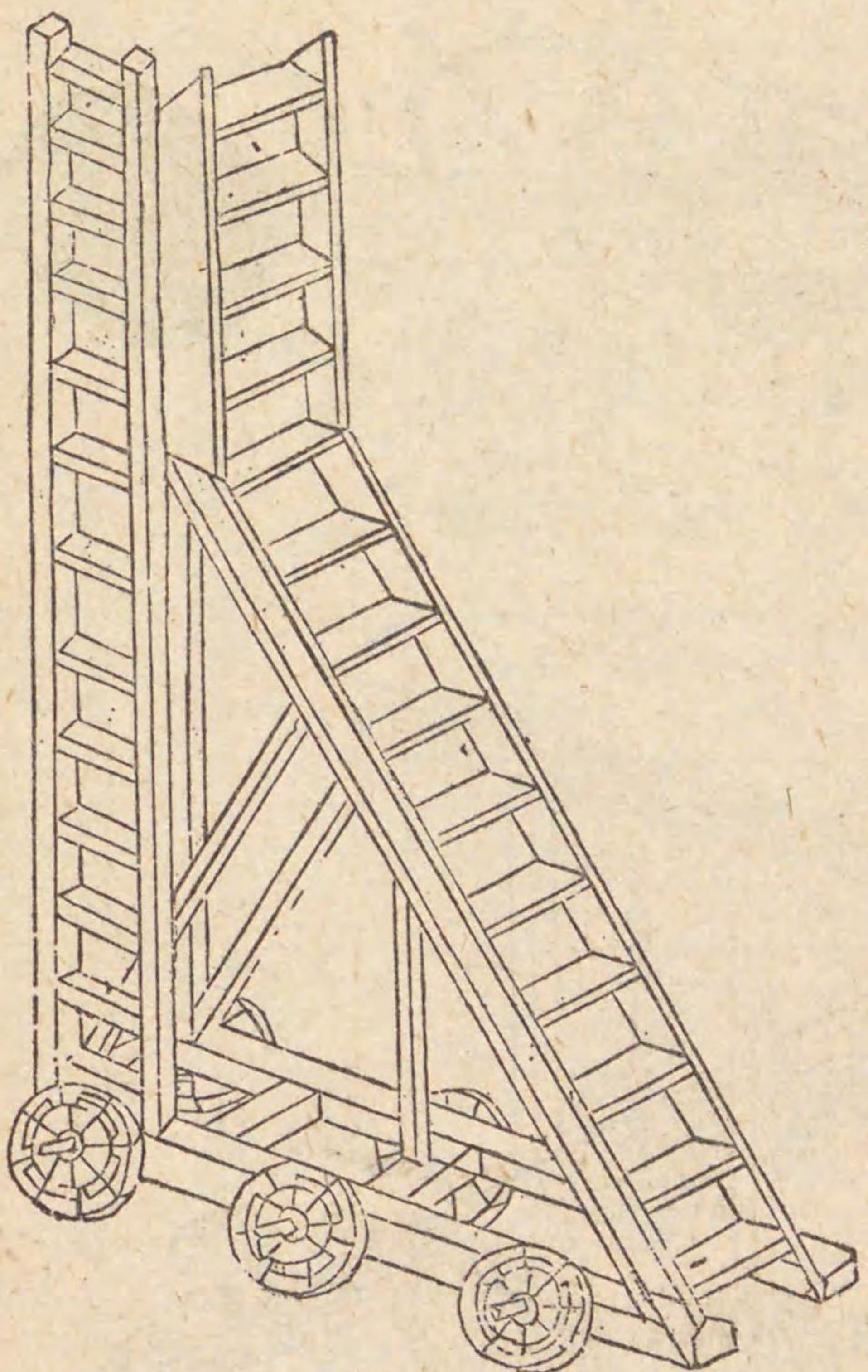


破門材



鳥居撞

城を攻撃する道具として、その他に子平は鳥居撞とりみつきと行天橋といふものを工夫してゐる。鳥居撞は圖のやうに鳥居のやうな車を造り、それに遊動圓木のやうに材木を



ぶらさげ、先端に厚い鐵の刃をくつけ、城壁や門に橋この鐵の刃を遊動天圓木で何度も何度も行もうちあてるのである。そして障礙物を破り毀すのである。

行天橋といふのは、圖の通りのものである。これを敵の城壁におしつけて、味方の兵士がこの梯子を駈けのぼつて城壁の中側へ躍り込み、敵城を占領するのである。

これらの新發明の戰術をくはしく述べた上、最後に「海國兵談」卷の九に至つて子平は一國の國防は戰術のほか「強い勇敢な愛國の精神」がなければならぬことを説いて、そのためにはさうした精神を養ふための學校が必要である、といひ、先きに掲げた文武大學校の圖を「海國兵談」卷の九に再びのせた。

國防は戰術と同時にその根本の力は精神である。子平はこのことをよく知つてゐるので、武田信玄の例を引き、

「信玄は偉い大將で、家來や、百姓をよく勞つたため、信玄の生きてゐる間は、その領地に一人の敵も攻め入つたことがないのに、その子の勝頼の代になると、信玄の生きてゐる時は鬼神をもひしぐかと思ふばかり強い家來たちが、一人も缺けずに

揃つてゐたのにもかゝらず、わづかに二年の間に織田信長らに攻め亡ぼされてしまつた。これはその大將の精神が強く正しくなくては、いかに武術にすぐれた家來たちがたくさん揃つてゐても、國は必ず破れてしまふといふ證據である。」
と、いふ意味のことを子平は述べてゐる。

大將だけでなく、今でいへば、日本の一億國民のすべてが銃前においてはもとより、銃後においても、一人残らず一身を捨て、國に盡す精神がなければ、日本が東亞の日本となることはできないのである。それは、今も昔も同じことでなければならぬ。

二十四、子平捕はる

仙臺の兄のうちで、貧乏に苦しみながら子平が「海國兵談」を版木に彫り、印刷して、世にひろめようとしてゐることは、次第に心ある人々に知られてゐた。五年前の天明七年に「海國兵談」の半分を印刷して三十部ばかり世に出した時、それを讀んだ人々が、子平の「千古の獨見」に驚いてあとを早く印刷するやうにと、ひそかに子平のもとへ本の代金を前金で送つてくる者が少くなかつた。

さういふ風に自分の志を知つてくれる人々にはげまされながら、子平はとうとうこの年、即ち寛政三年の四月、五十四歳の時に、「海國兵談」十卷を全部印刷しあげた。

子平はうれしくてたまらなかつた。長い間の苦心がやうやく實をむすんだのである。それがかうして世に残れば、今は幕府が自分の意見を用ひなくとも、やがてはこの書が國の役に立ち、日本を守る時がくるであらうと思ふと、子平は満足であつ

た。もう何も思ふことはなかつた。

子平は「海國兵談」卷の十の一番おしまひに自分で彫つたつぎのやうな判をおした。これはささに書いておいた子平の氣持ちをあ

らはす歌である。

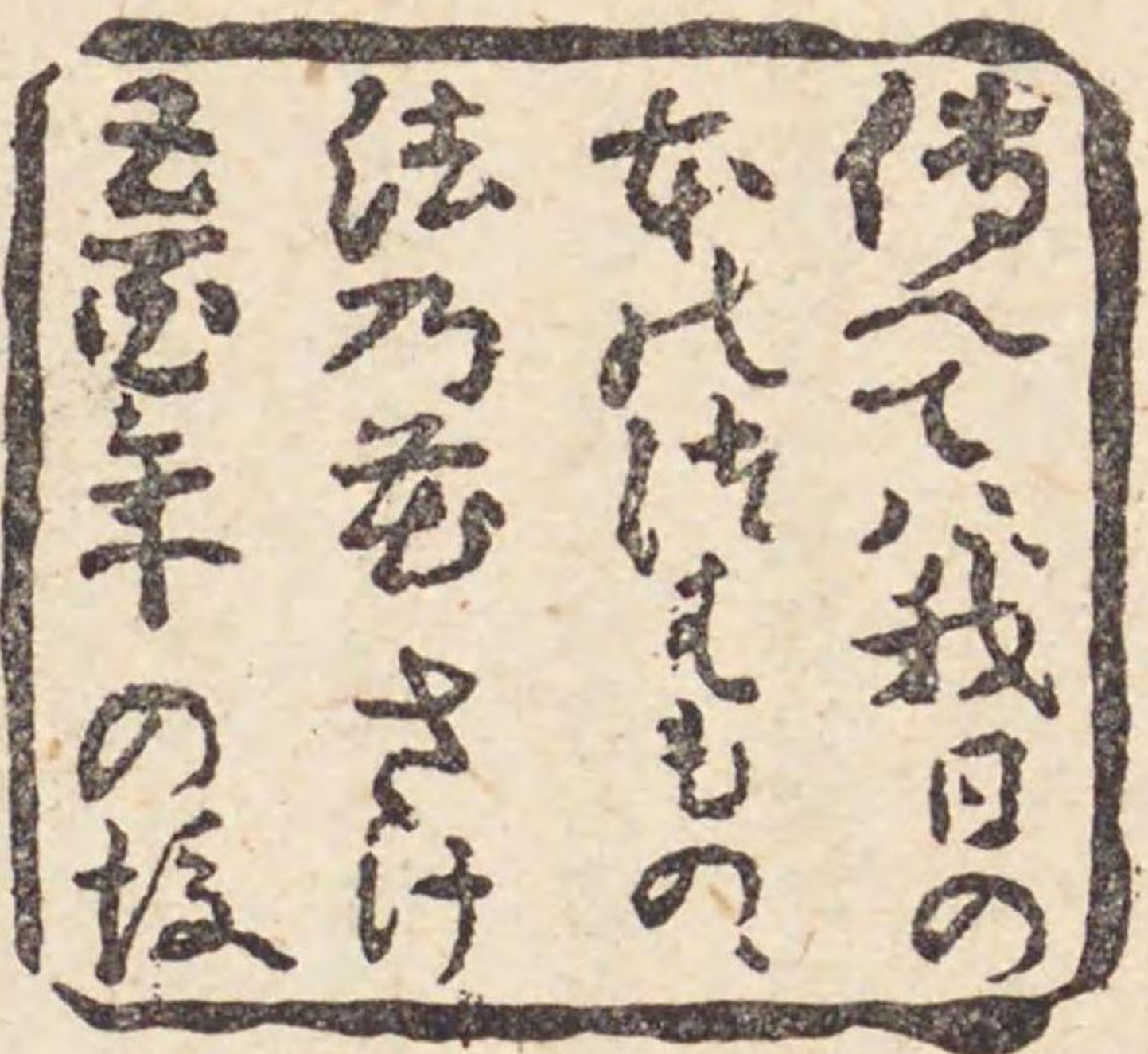
つたへてはわが日の本のつはもの

法のりの花さけい五百年はとの後のち

かうして「海國兵談」が世にでたのは寛政三年

四月のことであつた。

それから九箇月目の十二月になつて、幕府はだ



「海國兵談」のおしまひにおした歌の印

しぬけに仙臺藩に對して、林子平を逮捕して江戸に送つてこいといふ命令を發した。

同時に「三國通覽圖説」と「海國兵談」の版木や印刷しあがつた本を全部沒收して

しまつた。

子平は仙臺藩の役人に捕へられ、籠にのせられて罪人として江戸に送られた。芝愛宕下の仙臺藩中屋敷に着いて、そこに一室に閉ぢこめられた。

愛宕下の中屋敷は子平が少年時代に父とともに暮したなつかしい思ひ出の場所である。今は五十五歳になつた子平は、一生かゝつて國のために盡したあげく、幕府から罪人にせられ、少年時代に住んだ場所に閉ぢこめられたのである。折りから冬であつた。火の氣のない一と間のうちに、子平はあまりにもわけのわからぬ幕府のやり方を憤り、國の行末を憂へて臉も合はなかつた。疊の上に坐つて兩手を合はせ遠く故郷の鹽釜大明神を伏し拜むと、

「たとへ自分の命がここに終つても、『海國兵談』が世に残るやうに護りたまへ。日本の國が外國に攻め破られないやうに護りたまへ。」

と、涙を流していのつた。夜が明けると子平は藤塚式部に手紙を書いた。

「江戸について、まだ幕府の呼び出しはないが、『海國兵談』の版木を焼きすてられてしまふことになれば十五年來の努力も一時に消えてしまふ。何とも残念千萬に思ひます。そんなことのないやうにどうか鹽釜大明神にいのり下さい。無事に故郷に歸れるやうに神様においのり下さい。」

と、いふ意味のことを書いた。

しかし部屋の中の寒さと、心の苦しみのために、子平は幕府の呼び出しがある前に、病氣になつてねついでしまつた。

子平の體は日に日に弱つてきた。幕府からは二度も呼び出しがあつたが、とても子平は出て行くことができなかつた。子平がここで病氣になつてゐることは、仙臺の兄嘉膳も知らなければ友達の藤塚式部も知らなかつた。たとへ知らしたところで

かれらが自分を助けるといふことはできないではないか。たゞ心配させるだけだと思ふと、子平は病牀で次第に弱りながら、一人でがまんしてゐた。

しかし幕府は一體何のために林子平を罪人にして、『海國兵談』や『三國通覽圖説』の版木をとりあげたのであらうか？

その理由はほんたうはちつともわからない。寛政三年五月十六日になつて、病中の子平に町奉行小田切土佐守が與へた罪狀宣告の文をみると、

「林子平は自分が有名になりたいために、外國が今にも日本へ攻めてくるやうなとりとめもない想像を根據として、勝手な著述をした上、その中には日本の國防上書いてはならぬことも書いたり、でたらめの地圖を添へたりしたのがけしからん。」

と、いふ意味である。そのために子平は仙臺の兄嘉膳に引き渡されて、蟄居の罪におとされ、版木は全部とりあげられることになつた。しかし『三國通覽圖説』の

内容も「海國兵談」の内容も、決してでたらめでもなければ、自分が有名になりたいために書いたものでもない。又日本の國防上書いてはならぬ點を書いた所は少しもない。この時の幕府の老中は松平定信である。松平定信は賢い政治家であつたが、一方ではいたつて心の狭い人であつた。そのために、林子平の愛國の熱情を少しもとりあげようとせず、あべこべに子平を捕へて罪におとしたのである。

子平に罪のいひ渡しをしたのは町奉行であつたが、それをいひつけたのは松平定信である。子平は罪のいひ渡しをうけた翌々日の五月十八日に再び江戸をたつて、二十六日には仙臺の兄の家に送られてきた。病氣のまゝ籠に乗せられて辛くも死なずに兄のところへ歸つたのは、多分鹽釜大明神の加護があつたからかも知れない。子平は命を拾つて故郷に歸ることができたうれしさに、藤塚式部にあて、手紙を書いた。

「暑くてもお達者ですか、この間は手紙ありがたう。私は四五日前に仙臺に歸りました。いろ／＼話したいことが山のやうにあります、病氣中で伺へませんからついででもあらばどうかきて下さい。神様のおん前で毎日のやうに私の無事をおいのり下さつた由、何ともありがたく存じてをります。多分そのために今度の災難もこのやうに軽くすんだことと思つてをります。どうか他の人々にもよろしくお傳へ下さい。」

二十五、ひとりずまゐ

子平は兄の家の一と間で、蟄居の罪に服することになつた。蟄居の罪といふのはきめられた一と間に閉ぢこもつたまゝ、外に出てはならないといふのである。しか

し仙臺藩では別に子平を憎んではゐないし、子平の友達も、なほさら子平に罪があるなどとは思はないので、小川唯七といふ子平の友達が、

「そんなに一と間に閉ぢこもつてばかりゐないでも、少しは外に出て散歩もしてはいかがです。」

と、すゝめた。すると子平は答へた。

「いや、たとへ自分では罪がないと思つてゐても、幕府が自分を罪にしたのを知つてゐながら、その目をぬすんで出て歩くなどといふことはしてはならないことだと思ひます。」

小川唯七はいつた。

「しかしあなたが少しくらゐ出て歩いたところで江戸までわかりはしないぢやありませんか。」

すると子平は、正しく坐りなほしてからいつた。

「いや、私は幕府を恐れてはをりません。しかし神様を恐れます。自分の良心を恐れます。」

そして、傍の筆をとつて一首の歌を書いて唯七にみせた。

月と日のおそれみなくばをりをりは人目のせきもこゆべきものを

かうして、子平は明けても暮れても一と間に坐つてゐた。しかし次第に體が弱つてきて、今では坐つてゐることすらできなくなつて、おほかたは蒲團の中にねてゐなければならなかつた。

友達の藤塚式部は鹽釜から五里ばかりの道を遠しとせず、たえず訪ねてきては子平を慰めた。

子平が式部にいつた。

「なあ、藤塚さん。わしも今年は五十五歳で、ずるぶん長く生きたものだと思ふよ。そして一生涯を『海國兵談』の出版に費した。その仕事のために妻もめとらず子もなく、今では父も母も死んで自分には一銭のお金もない。何もないがそれでもやはり生きてゐたい。死にたいとは思はないぞ。」

「林さん、どうしてそんな心細いことをいふのだ。少し養生すれば必ず元氣になるから、どうか心静かにねてゐたまへ。」

「ありがたう。」

と、子平は弱りはてた顔に笑ひを浮べて、

「親もなく、妻なく、子なく、版木なく、金もなければ死にたくもなし………」といふ一首が今思ひ浮んだ。は、は、………」

「なるほど、その歌はおもしろい。」

「藤塚さん、わしには無いものが六つあるから、これからは六無齋と名乗らうか。」式部は笑ひながらうなづいた。

「うん、六無齋とはいゝ名前だ。」

一生をかけた仕事である「海國兵談」の版木まで没收されてしまつて、病ひの床によこたはつてゐるこの友達を、藤塚式部はどういつて慰めていゝかわからない。子平の心の中を察すると、ともすれば式部の臉はぬれさうになるのであつた。

かうして病床の裡うちにその年が暮れて、寛政五年の元日となつた。子平は五十六歳である。蟄居ひその罪はまだ解けない。

元日の朝早く、藤塚式部は雪を踏んで鹽釜から子平を訪ねてきた。二人でお雑煮をたべて、

この春も淵にひそむかさてはまた陸にをどるか命をはるか

と、子平が紙に書いて式部にみせると、式部はそれをうけとつて、

沈みてもこと木ならねばひたぶるに唐からたきものと世に匂ふらん

子平が今年は重たい木が淵に沈んでしまふやうに自分の命もをはるのかも知れな
いと嘆いたのに對して、たとへ沈んでも子平の名は匂ひの高い唐木の如く世界中に
つたはるだらうといふ意味の歌をうたつたのである。それに對して子平は又「返し」
と書いて、

ひたぶるに唐たきものと匂はずもありしこの世に身を浮べてし

と、いふ一首を式部にみせた。たとへ自分の名が世界中につたはらなくてもいゝ
から今この世の中にもつと生きてゐたいといふ意味である。子平の淋しい心持ちを
知つて、式部は顔もあげられずわきを向いて、涙をおとした。すると子平は、式部
の肩をたゝいて笑つた。

「藤塚さん、今のは冗談だ、はははは……。」

そして、机の上にそなへてあるかがみ餅を片手でひきよせて、

「かうして、役にもたゝない弟のためにも、お正月といへばかがみ餅の用意までし
てお祝ひをしてくれる兄の心ありがたい。」

と、いひながら子平は筆をとつて餅の上に又一首の歌を書きつけた。

ながらへて家のうれひをますかゞみもちひられねば照る時もなし

式部はかがみ餅を両手にとつて、その歌をみて子平と顔を見合せ、聲をたて、笑
つた。

さうして式部が歸つたあとで、子平は残りの紙を手にとり、眼をとちてしばらく
考へ、眼をあいては筆に墨をつけて、自分の思ひを歌に書いて行つた。

なか／＼に世の行末をおもはずばけふのうきめに逢はまじものを
世をおほふ言葉の梢たかければ枝をならさぬ風にあたれり

千代ふりし書かみもしるさず海の國の守りの道はわれ一人みさ

世の中をうらみとがめずひたすらに身のつゝしみを忘れずのやま

これらの歌には子平の心の苦しみや反省がすべてよくうかゞはれるのである。

二十六、教訓いろは歌

お正月がすぎると子平の體は次第に弱つてきた。病ひの床にうつら／＼しながら、

子平は自分の志が何事もかなはなかつたことを思つた。しかし何十年、何百年の
ちには必ず自分の志は生きるにちがひないと信じた。いやそのときはもうすぐやつ
てくるかも知れない。さう思ふと子平には、今の日本の子供たちの大きくなつてく
るのが待たれてならなかつた。その子供たちが大きくなれば、必ず自分の志をつい
で日本の國を護り、日本を強い國にするにちがひないと思つた。

自分がこの上もつと生き延びて、子供たちをさうした立派な大人に育てるために
自分の考へを教へることができないのが残念であつた。せめてこの臨終の床で、の
ちの日本の子供たちのために役に立つことをしてやりたい。それには子供たちの精
神を鍛へる教へを遺しておきたい、と子平は考へた。それから子平は、子供たちの
ために、「教訓いろは歌」といふものを書きのことさうと思ひたつた。いろは四十七
文字を頭字かしらじとして、四十七首の教訓の歌をつくるのである。

子平は病ひの床に肘ひでを起して、心をこめて次ぎ次ぎと、いろは歌を書いて行つた。そのいろは歌は日本の子供たちへ子平の遺した教へとして今にのこつてゐる。次ぎのとほりである。

いとけなき人もよくきけいろは歌、五つの常の道(仁義禮智信)しるべぞと

ろなう(勿論)とも貴たかさいやしさいはずして、年たけまさる人を敬うやまへ

はないきは静かに長く臍さい下まで、ゆくは文武の氣まぐらゐの本もと

にんくにおのが身の上つしまで、よそのよしあしいふぞつたなき

ほど／＼の禮儀わするな朝夕に、心やすしと語るなかにも

へりくだり人を敬ふほどぞよき、己れをさきにするは不禮よ

とにかくに人のあしきといつはりは、いふな語るなこれぞ愼しん獨どく

ちゝ母の恩は須彌山すみせんわたつ海、高さ深さのかぎりなければ

理非りひはたゞひいきの沙汰をとりかけて、理の當然をあきらかにせよ

ぬきんでてわれしりがほにもいふな、人の智慮には上に上あり

るゐをはなれぬせもの風を好むなよ、あたりさはらぬ身持ちこそよき
をしやほしやかねて食ひたいものなれど、こゝが良智と義理の用ひ場
わるざれのはては口論喧嘩なり、戯れごとほほどよきぞよき
かうくゝに五つのしなのあるぞかし、よくわさまへて親につかへよ
よみ書はまづ一の藝そのつぎは、刀に槍に弓馬と知れ
たしなめよ耻は卑賤にかなしみは、貧より上の事はあらじな

れい儀にもそのほどくゝの差別あり、足らぬは不禮すぎる追従つみしやう

そだちがらよきはその身のほまれかは、親祖父おやおぢの名もあがるなり

つらくせのわるきは胸のよこしまの、穂いっに出るなりよくかへりみよ

ねん力は岩をも通す習ひなり、勇氣ゆるむな心たるむな

なにごとともそかゝせずいに精いだせ、月日は鳥のとぶよりもとし（早し）

らくを好み文武の藝もせぬ人は、君への不忠親へ不孝ぞ

むか〜と腹の立つときかへりみよ、理か非か又は短慮なるかと

うつりやすき心は人の大耻よ、緇くろにすれどもくろまぬぞよき

ゐながらに唐や大和の名所を、知るは歌よみ詩作りの徳

のちといはずすぐにあやまち改めよ、延ればわすれ怠りも出る

おのれよく正しき友に交はれよ、人のあしきは我れあしきなり

くるゝより讀書精だせひるのまは、ものゝふの業わざ又は六藝

やすらかにもの言ひならへかりそめに、理窟がましき言葉つかふな

まことだに影ひなたなくつとむれば、たすけあるべし天地あめつちの神

けふといひあすといひつゝ怠れば、老い行く年ぞ悔いてかへらず

不禮をも不禮としらぬ人はたゞ、かたちは人よ胸はちくしやう

こゝろをばいかせ殺すなかたよるな、高く小さくのびやかにもて

えん慮なく人にももの言ひすごすなよ、一度の過言かへらざりけり

て、んこうこれ放心のしるしなり、心とまればこの癖はなし

あしたにはやく起きつゝ氣を正し、とく相應に稽古ごとせよ

酒のまばいよゝ心とりしめて、まはされまじと臍はせをかためよ

目には見て心にみるな鼻にかぎ、心にかぐな穢けがれくさみも

身もちをばちや子家の子うゑさず、凍こえぬために儉約をせよ

しよじやく(書籍)をばかずゝ讀みてことのと、多く知るべし迷ひさむべし

ゑにかかばさぞ見苦しくむさからん、わが日々の不禮不作法

ひと言の誓ひもあだに食はむまじと、をさなき人も思ひ設けよ

もろこしの文のみ讀まず日の本の、記録軍談たえず見るべし

ぜひをよく辨へならへとやかくと、切れ放れざる人ぞつたなき

すきにのみ深くなづむは志こころざしを、失ふたねとかねて知れかし

二十七、子平の死

そのうちに夏となつた。子平の病氣はいよゝゝ重くなつた。枕もとには兄の嘉膳をはじめ藤塚式部や、子平が故郷へ歸つてきて以來、親切に子平の世話をした小川唯七親子や、その他の人々が集つてきた。

子平は枕もとに集つた忘れがたい友だちを見て一人一人に、それ〴〵世話になつた挨拶をした。その時、人々のうしろに、兄の娘の久子が眼を泣きはらしてゐるのを見て、子平は久子を傍に呼んだ。

「叔父さんは長い間お前たちの世話になつた。何にもこれといつてお禮をするものがない。たゞ長い一生の間に、さまざまの苦勞をしたから世の中のことが少しわか

つてゐる。お前たちのために心の教へになることをこゝに書いておいた。これをあとで見ってお前たちだけでなく、世の中のたくさんな子供たちにひろめてもらひたさう。」

かういつて、子平はいろは歌の草稿を久子に渡した。そのあとでなほも子平は久子にいつた。

「叔父さんは、お國のために『海國兵談』を書く仕事に生涯を費したために、とうとう、妻もなく過してしまつたが、決して女を賤んでゐるのではない。人は大人となつたら必ず夫婦相助けて、國の礎とならねばならない。男が大切なやうに、女ももちろん大切です。お前もどうか立派な夫を持つて、いゝ子供をたくさん産んで、家のため、國のためにつくすやうに心がけなさい。そして平生は何事もよくしんばうして、親子兄弟はいつも仲よく暮していかなければなりませんぞ。さうだ、世の

中は誰もみなお客にきてゐると思へばまちがひはない。お客にきてゐると思へば、のんきで楽しいだらうし、そのかはり、夏は暑いといつても、お客だからがまんしなければならぬ。冬は寒いといつてもお客だからやはりしんばうしなければならぬ。まづい食べ物でもお客だから食べなければならぬし、親子兄弟はみな一しよのお客だから仲よくするわけだ。どうだ、わかつたかね。」

子平は、かんでふくめるやうに久子にいひきかせた。久子は、泣きながら「はい。」と答へた。叔父さんのいつたことをほんたうに自分の心がけとしなければならぬと思つた。

子平は自分が息をひきとるまぎはまでもさうして、子供たちのために心を使つたのである。

やがて子平の命が、火の消えるやうに、盡きる時がきた。苦しさうにはいてゐた

息も、今はたえぐとなつた。式部が枕もとによつて、

「何かいひおくことを……」

辞世のつとめ

友直

すゝみふまらうらのうら
かつらら此処くこよまきん
死しやう

子平辭世の歌

と、涙の聲でいふと、子

平は、

「筆々。」

と、よんだ。そして式部が子平の手に筆を持たせると、それでも最後の力をこめて、はじめに「辭世の心を」と書き、次ぎのやう

な歌をやうやく紙に書いた。

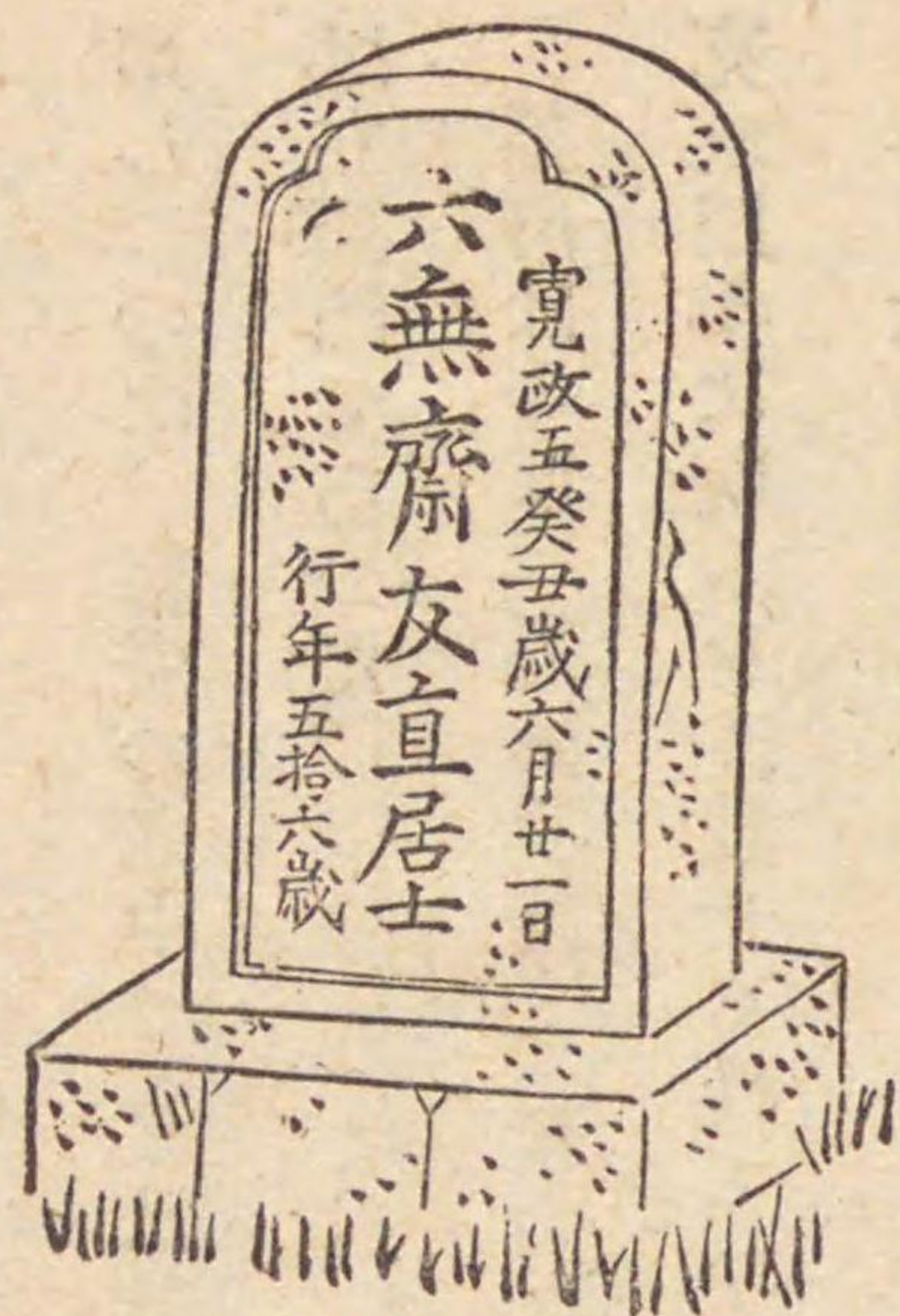
すくふべきちからのかひもなかぞらのめぐみにもれて死ぬぞくやしき
子平が、いかに生前に自分の志の達せられなかつたことを残念に思つてゐるかゝ
わかる。

みんなは子平の枕もとに集つて、この歌を見て泣いた。林子平は寛政五年六月二
十一日、五十六歳を以て世を終つた。けれども子平は幕府から蟄居を命ぜられた罪
人である。罪人の墓を建てることは許されないのである。

一生涯を、林子平は生きてゐる間は、その志がうけいれられなかつたが、死んで
も墓さへ建てることを許されない有様であつた。

子平が死んで四十九年目といふ長い／＼のちになつて、幕府は將軍家齊が天保十
二年六月、朝廷から左大臣に任ぜられたお祝ひのためだといつて、やうやく子平の
罪を許すといふ申し渡しを與へた。

子平は死後半世紀も後になつて、「六無齋友直居士」といふ石碑を立てることが
できたのである。その墓は、高さ一尺八寸、巾九寸、厚さ六寸五分の小さな墓で、
これが日本最初の軍事科學の英雄の骨を埋めた標しるしである。



石碑
高一尺八寸
幅九寸
厚六寸五分

そして墓を建てることは許されて
も子平の著はした「海國兵談」は、も
つとのちまで版木を没收せられたま
ま、世に出すことができなかつた。
それからさらに十三年たつて、嘉
永六年、浦賀にペルリがやつてきて

日本に開國を迫つた。さかなければ攻撃するといふのである。徳川幕府は、ペルリ
の黒船にびつくりして、上を下への大騒ぎをはじめ、どうすればこのおそるべき外

國船を防げるかといふことを心配しなければならなくなつた。その時になつて、はじめ、丁度六十二年前に「海國兵談」に書きのこしておいた林子平の、海戦の戦術を用ひねばならなくなつてきた。「海國兵談」を研究してすぐにこれを實地に應用したのは、幕府の老中である阿部伊勢守の命をうけて、國防の工夫をした江川太郎左衛門であつた。

幕府は今は「海國兵談」を新たに出版して國中にひろめなければならなくなつた。寛政四年に版木を沒收せられてから實に六十五年目の安政三年になつて「海國兵談」は再び世に出された。

人々は争つて、子平の「海國兵談」を読み、その中に書いてある陸海軍の戦術を研究した。

子平のやうな人こそ最も早い日本の軍事科學者、いな、その精神は科學の英雄、

といふことができるのである。

そして、林子平のやうな人が日本に産れたといふことは、日本人こそ大東亞の建設をなし遂げる力のある昭和時代の科學の英雄をたくさん産み出す民族であることを教へる生きた證據であるまいか。

明治天皇は東國巡幸のをり、子平の愛國の精神に叡感の餘り、祭糝料を賜はり、こえて、明治十五年六月三日、林子平に正五位の位を贈られ、大正七年一月十八日、大正天皇は、さらに子平を正四位に追敘あらせられた。

「恵みにもれて死ぬぞくやしき」と歌つた子平は、藤塚式部をはじめ高山彦九郎や蒲生君平のいつたとほり、天皇の御世となつてはじめてありがたい皇恩に浴したのを知つて、地下に感泣してゐることであらう。

——をはり——

日本科學英雄傳 ①
海國兵談

出文協承認ア80618



昭和十七和八月十五日印刷
昭和十七年八月十八日發行
(二〇〇〇〇部)

Ⓢ 定價壹圓參拾錢

著者

貴司山治

發行者

和田利彦

印刷所

東京市京橋區湊町三ノ十二
大倉印刷所

發行所

株式會社
東京市日本橋區通三ノ八
春陽堂書店

春陽堂大阪出張所

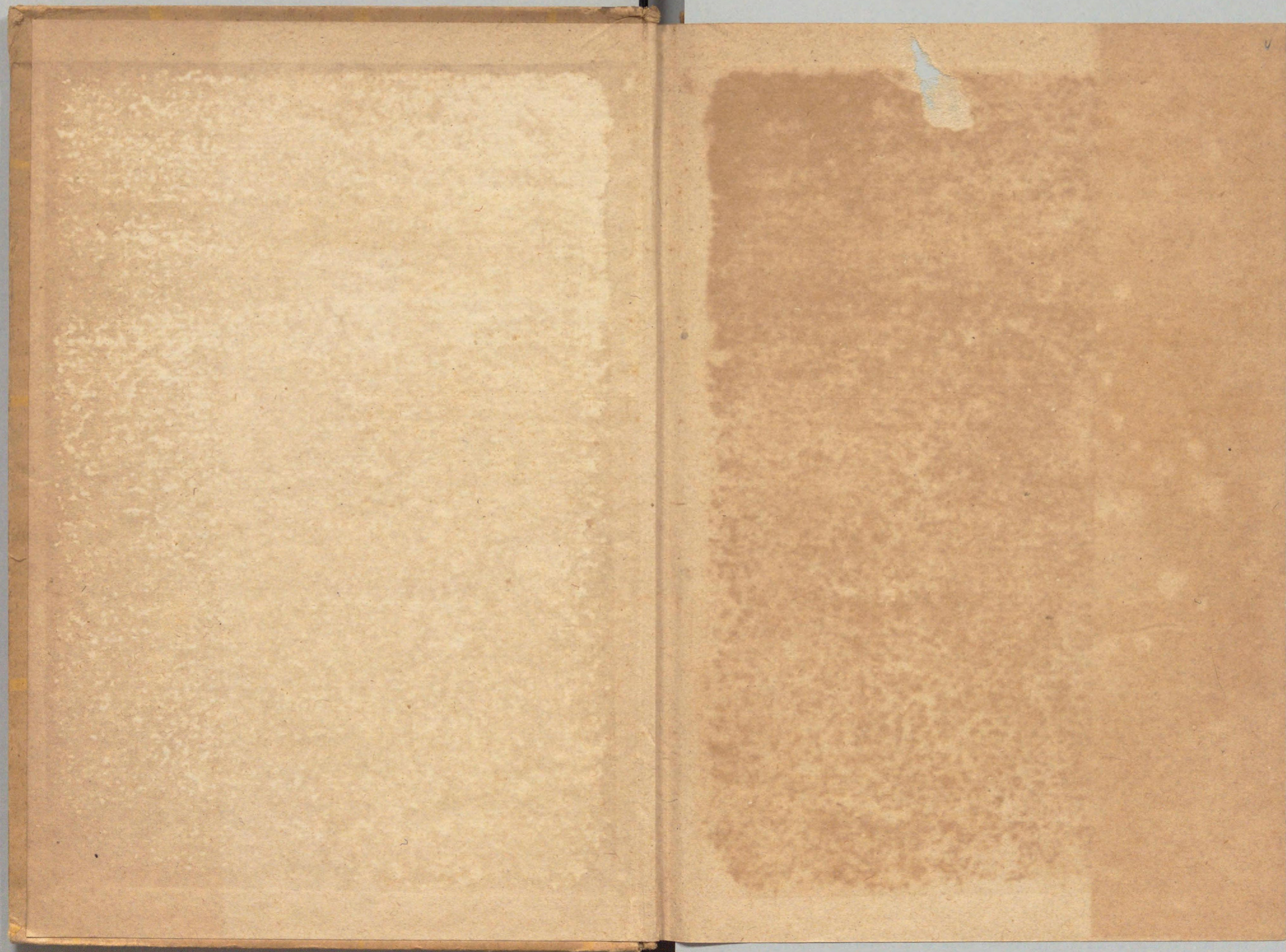
大阪市東區島町二ノ六
振替大阪六一六二四番

配給元

日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

會員番號一一二五四〇

吉川英治	忠臣藏	二二〇	竹田敏彦	妻の幸福	二一五
吉川英治	梅颯の杖	〇九八	竹田敏彦	生産化粧	一一七
木村毅	海峡の風雲兒	一五〇	竹田敏彦	脂粉追放	一一九
木村毅	荒城の月	〇九八	竹田敏彦	拓士の妻	一五〇
木村毅	颱風の北	一七五	竹田敏彦	街の戦友	二〇五
寒川光太郎	最終航路	一七五	納言恭平	日の出島	一九五
加藤武雄	鏡中の影	〇九八	尾崎一雄	玄關風呂	一九五
中野實	明日の愛情	二五〇	丸山義二	ふくろしよひ	二五〇
藤澤桓夫	郷愁	一九五	山手樹一郎	戊辰進軍譜	二四〇
藤澤桓夫	緑の褥	〇八〇	山岡莊八	不二の操	一七五





春
陽
堂